

令和3年度  
「琉球文化ルネサンス」に関する万国津梁会議  
中間報告

令和4年3月 25 日

「琉球文化ルネサンス」に関する万国津梁会議

## 目次

1. はじめに.....	1
2. 琉球文化の性格.....	2
3. 琉球文化の本質的価値 .....	4
4. 琉球文化ルネサンスとは.....	5
5. 琉球文化ルネサンスのビジョン(将来像) .....	5
6. 琉球文化ルネサンスの実現に向けて .....	6
7. 令和4年度における議論の進め方 .....	10
「琉球文化ルネサンス」に関する万国津梁会議 中間報告(概要).....	13
<b>【参考資料】</b>	
1. 委員名簿.....	15
2. 会議録概要 .....	16

# 1. はじめに

令和元年10月31日に発生した首里城火災は、国内外に大きな衝撃を与えたが、多くの方々から寄附金が寄せられるなど一日も早い首里城正殿等復元への機運が高まっただけなく、琉球の歴史・文化を再認識する契機ともなった。

そのような中、令和3年には「琉球・歴史文化の日」が条例化されるとともに、沖縄が本土復帰50周年を迎え大きな節目となる令和4年には、新たな振興計画に基づく施策がスタートし、首里城正殿復元工事に着手するなど、県民が琉球の歴史・文化への理解を深め、その価値を国内外に発信していく絶好の機会が重なってくる。

一方、首里城への関心は高まったが、琉球の歴史・文化に関する認識は、地域によっても異なっているという事実も指摘されているところである。そのため、首里城に象徴される王朝文化のみならず、各地域に継承されている多様な民俗文化も含め、琉球文化を幅広く捉えるとともに、沖縄の文化を支える地理的・歴史的条件についても再度、認識を深める必要がある。

地理的に沖縄県は、アジア大陸の東側、日本本土の南西に位置し、48の有人島を含む大小約160の島からなる島嶼県であるとともに、これらの島々はおよそ北緯24度から28度、東経123度から131度まで、距離にして南北約400km、東西約1,000kmの広範囲に広がっており、広大な海域に囲まれている。そのため、自然的特性が異なる島々において、地理的特性を生かしたアジア・太平洋諸国との交流などを通して、多様かつ独特な文化が育まれてきた。

また、歴史的には、琉球文化は琉球王国時代の王朝文化を軸として発展した面はあるが、各地域の民俗文化が基礎となって、時代とともに重層的に発展してきたという面もあり、沖縄本島だけでなく、宮古・八重山諸島等の離島の文化にも着目する必要がある。また、琉球文化はアジア諸国、日本本土、アメリカ合衆国からの影響を受け、時代とともに大きく変容しながらも、先人達の英知によって沖縄の精神、風土的文化と融合させることで、その本質的価値を失うことなく、現代に継承されてきているということも忘れてはならない。

以上の認識をもとに、令和3年度に「琉球文化ルネサンス」に関する万国津梁会議を設置し、琉球文化を、首里城に象徴される王朝文化のみならず、各地域に継承されている多様な民俗文化も含めて広く捉え、県民がその価値を再認識するだけでなく国内外に発信し、沖縄県としての一体的な取組につながっていくための方策等について有識者で議論してきたところである。

本報告書は、有識者の意見をもとに「琉球文化の性格」「琉球文化の本質的価値」を整理し、その内容をもとに「琉球文化ルネサンスの将来像」及び「琉球文化ルネサンス実現に向けた取組の方向性」などについて議論を行い、中間報告としてとりまとめを行ったものである。

## 2. 琉球文化の性格

琉球文化は、亜熱帯島嶼の精神的・風土的要素をもとに、歴史的経緯や海外との関係性により形成された、多様性かつ独自性の高いものである。

本会議においては、委員からの意見をもとに、琉球文化の性格を地理的・歴史的な特徴から以下の4つに整理することとする。

### (1) 広い島嶼圏にある個性豊かな地域性

沖縄県は、温暖・多湿な亜熱帯気候のもと、広大な海域に島々が散在する島嶼県であり、島ごとに自然環境が異なっている。その自然環境により生まれた地域ならではの風土を背景に、ことば（しまくとぅば）、食、工芸、祭祀・芸能など、個性豊かな文化が育まれ、沖縄本島及び周辺離島と、宮古諸島、八重山諸島においては、それぞれ独自の生活様式や文化圏を形成してきた。

#### 委員意見

- 琉球文化の多様性は、自然や、各島々が持つ独自の文化に表れている。
- 自然や生物の多様性を豊かに持つ沖縄の強さ、沖縄の価値をうまく表現し、伝えていくことは重要である。

### (2) 自然への畏敬の念や祈りの精神性

琉球文化は人々の生活や信仰といった日々の営みと密接に関わりあいながら、育まれてきた。雄大な海や山を目前にした人々は、自然への畏敬の念から生み出した世界観や精神性を基礎とした営みを形成し、それらが継承され、信仰や祭祀、ひいては民俗芸能や集落景観などの独自の地域文化を形成してきた。自然への畏敬の念や祈りといった沖縄の精神的風土を基層とすることも琉球文化の性格のひとつである。

#### 委員意見

- 自然に対する畏怖や、祈りが島々の文化を形成してきた本質的な部分である。
- 祭祀や伝統行事などの根底には、自然への畏敬の念や神々への祈りがあり、とても大事にすべき核である。

### (3) 琉球王国の体制下で洗練された芸術性

工芸、音楽、芸能、料理等については、琉球王国の体制下において、王族や上流階層の生活様式に見合うものとして、また外交上のもてなしの場や献上品として、より

洗練された芸術性の高いものへと発達した。これらは庶民階級や地域の文化にも波及し、これと融合することで、現在の伝統文化の骨格となっている。

#### 委員意見

- 琉球文化を重層的に捉え、「王朝性」を絶対化し過ぎず、多面的に捉えることが重要。
- 琉球王朝でのもとで生み出された文化が、島々の文化と相互に影響し合い、新しいことを取り入れることにより違ったものが生まれた。
- 「王朝性」と「島々の文化」が相互に関係し合う構造を多くの人に認知してもらうことが重要。

### (4)外来文化を取り込み発展させた国際性

琉球文化は、アジア・太平洋諸国や日本本土との交易を通じ、様々な文化を取り入れながら、国際性豊かなものへと発展してきた。また、琉球王国時代、琉球処分による明治政府の統治時代、戦後のアメリカ統治時代から現在に至る世替わりの歴史においても、先人達は外来文化を受容し、新たな文化を育んできた。このように長い歴史の過程で様々な交流を通じて積み上げられた国際性豊かな性格は、「チャンプルー文化」と呼ばれるように、琉球文化の魅力のひとつとなっている。

#### 委員意見

- 琉球文化そのものが国際的なものである。
- 琉球文化は、南西諸島の人々が外との交流により新しい文化をつくり出している。
- 沖縄の芸能は、どの国でも共通する普遍的価値を内包している。
- 国際的な取組をするうえでは、相手の国の事情に合わせて展開していく必要がある。

### 3. 琉球文化の本質的価値

琉球文化の性格を踏まえ、「琉球文化の本質的価値」を以下のとおり整理する。

#### 【琉球文化の本質的価値】

自然への畏敬や祖先への敬いなど、先人達から今を生きる県民に  
継承されてきた沖縄のこころ

琉球文化には、独自の言語（しまくとぅば）をはじめ、芸能、空手・古武道、工芸、食文化、伝統行事、文化財、文化的景観などがある。これらは、農耕社会を背景にした自然に対する畏怖や神々への祈りを基層にしながらか琉球王国としての歴史的経緯や諸外国との交流を通じて発達し、地域性、精神性、芸術性、国際性といった性格のもと、独自の感性や美意識、芸術的様式・形態・技術を生み出してきた。さらに琉球文化は、時代の変遷とともに、形や表現などを変化させてきたが、多様なものを受け入れる包容力といった根底となる精神的な部分は、我々県民の生活の中に溶け込みながら、今日まで受け継がれている。

こうした今日まで引き継がれる琉球文化と我々との深いつながりは、目に見える部分だけでなく、精神的な部分においても琉球文化の本質的な価値として継承されている。特に、自然に対する畏敬の念や祖先への敬いなど、今を生きる県民の心にも根付いている先人たちの思想・哲学などは、琉球文化の本質的価値として非常に重要なものである。

#### 委員意見

- 自然に対する畏怖や祈りが島々の文化を形成した本質的な部分である。【再掲】
- 祭祀や伝統行事などの根底には、自然への畏敬の念や神々への祈りがあり、とても大事にすべき核である。【再掲】
- 多様な文化を受け入れる懐深さや、今の文化や工芸を作る力強さも琉球文化の価値である。
- 琉球文化の価値は大きく2つある。ひとつは文化そのものが持っている価値、もうひとつは文化が生まれた歴史背景や先人達の想いである。その文化的背景も今後伝えていくべき重要なことではないか。
- 伝統文化は時代によって変化するが、変えないもの、守る必要があるものを今後どうしていくかという議論が必要。
- 県内と県外で、琉球文化の本質への理解は違う。一方で、文化の担い手の立場・状況によって、価値のとらえ方が違ってくることにも理解が必要。
- 本質的価値というのはとても難しく、社会は変容している。現代社会では、自然への畏怖や意味を理解せずに文化を継承している。我々の価値観の変容を含めた検討が必要。
- 文化的な本質的価値は答えをすぐにだせるような簡単なものではない。次年度以降、更に踏み込んで検討していくのがよい。

## 4. 琉球文化ルネサンスとは

「ルネサンス」とは、「14～15世紀のヨーロッパ社会で起こった革新的な文化運動であり、古代文化を理想とし、それを復興させつつ新しい文化を生み出そうとする運動」（ブリタニカ国際大百科事典 小項目事典より）と解されている。令和元年10月31日の首里城火災を契機とした琉球の歴史・文化に関する関心の高まりを踏まえ、「琉球文化ルネサンス」を以下のとおり捉えることとする。

### 【琉球文化ルネサンスとは】

県民が自らの歴史・文化への理解を深め、それを大切にしつつ、日々の生活の中で関わりながら、新しい文化や生活スタイルを創造する、その大きな活動のこと

## 5. 琉球文化ルネサンスのビジョン(将来像)

「琉球文化ルネサンス」を実現するためには、県民を含め関係者が琉球の歴史・文化に対する理解を深めるだけでなく、ビジョン(将来像)を示し、具体的な取組につなげていくことが重要である。

そのため、委員からの意見を踏まえたビジョン(将来像)を以下のとおり整理する。

### 【琉球文化ルネサンスのビジョン(将来像)】

- ・ 県民一人ひとりが地域の歴史・文化への理解を深め、先人達から継承されてきた伝統のすばらしさを実感し、自信と誇りを持つ。
- ・ 日々の生活の中で琉球文化に親しみ、感動や共感を育むとともに、その魅力を国内外に広めていく。
- ・ 琉球文化が、観光・産業・教育などの様々な分野と結びつき、新たな価値や魅力を創出することにより、生活と経済の好循環を生み出す。

### 委員意見

- ・ 今、どういう形で新しい文化を想像し、創造していくかが問われている。
- ・ 伝統的産業の背景に文化があり、産業を育んできたことそのものが文化ということを手や客、情報発信する人も理解する必要がある。そのため、もう少し踏み込んだ表現ができないか検討していく必要がある。
- ・ 今後の社会において「文化」というものはこれまで以上に強みになる。沖縄県においては文化の保存だけでなく、沖縄の強みの1つになることを意識して、将来像の実現に向けて推進していただきたい。
- ・ 沖縄だからこそやらなくてはいけないという方向性を打ち出さないと、ルネサンスという言葉には似合わない。

- 観光でもよく言われている量から質へという問題。本物を見せることが今後の沖縄の文化に関する1つのキーワードになる。

## 6. 琉球文化ルネサンスの実現に向けて

### (1) 琉球文化を一体的にとらえた戦略的取組の必要性

沖縄県は、沖縄本島、本島周辺の離島、宮古圏域、八重山圏域といった大小様々な島において、それぞれが独自の生活様式を育み、文化を継承してきた。また、琉球文化には、しまくとぅば、芸能、工芸、空手、食文化、年中行事など多様な分野・テーマがあり、県や市町村においては、各施策に基づいた取組が行われている。しかし一方で、「文化を歴史の流れのなかで理解していく」という文化の全体像をとらえた視点からの取組が不足しているように考えられる。

琉球文化ルネサンスの実現に向けては、個別の取組だけでなく、琉球文化を一体的にとらえ、総合的に進めるという視点（方向性）を持ち、関係者（県、市町村、企業、文化活動を行う団体、個人等）が連携し、戦略的に取組を進める必要がある。

そのためには、県の文化施策などを評価するとともに、関係者が将来像を共有したうえで相互に連携していくための仕組みや、各々の主体的な取組に対する県の支援体制や財源などについて検討していくことが必要である。

#### 委員意見

- 琉球文化を「歴史の中で理解していく」という視点で戦略的に文化政策を進めることが重要。
- 個性(違い)を尊重しつつ、これらを総合力としてどう力に変えていくかという議論が必要。
- 戦略的な取組を誰が、どこで、どのように決めるのかという部分が見えづらく、それが来年度以降の検討課題の一つになる。
- 県としてこれまでの文化行政の施策を評価しつつ、どのようにして琉球文化ルネサンスとつながるかを考える必要がある。
- 一体的に推進することは理想だが、どこがそれを取りまとめて推進するかという課題がある。

### (2) 個別取組の方向性

#### 【提案①】持続可能な仕組みづくり

工芸や芸能をはじめとする琉球文化を継承していくためには、各分野の担い手が社会で生活と経済活動を両立し継続して活躍出来るよう社会全体で支えていく取組が必要である。

工芸においては、後継者不足や経営基盤の弱さが課題としてあげられる。その事例として、宮古上布や八重山上布の原料である苧麻（ちょま）を紡ぐ人材が不足しており、各地域において技術者の育成を行っているが、なかなか定着しない現状について



意見があげられた。そのため、技術・技法の継承、後継者の育成、原材料の安定確保、販路の開拓等による経営基盤の安定化などに向けた仕組みづくりが求められている。

芸能の分野においては、国立劇場による組踊養成研修など、後継者の育成に向けた取組が行われているが、育成した担い手が活躍できる機会（公演）が少なく、芸能活動のみでは十分な収入が得られない状況である。そのため、実演家だけでなく、マネジメントやプロデュースを行う人材を育成するとともに、その活動を支援し、活動の場を創出するなど、総合的な視点に立った継続的な取組が重要となる。

このように、琉球文化の各分野において担い手が生活と活動を継続していくためには、その活動を支える関係者の存在なども念頭に置き、トータルプロデュース的な視点を持って各種取組を進めて行く必要がある。そのためには、行政だけでなく民間企業、高等教育機関を含めたステークホルダーが連携し、協働する仕組みづくりが必要である。

また、文化活動を支えている県内の民間企業や団体の取組に対する共感を広げるとともに、これらの団体が継続して取り組んでいくための支援などについても検討していく必要がある。

#### 委員意見

- 職人ができない部分（企業との交渉や販路開拓など）をビジネスの部分で補うなど、持続可能な仕組みにしていく必要がある。
- 実演家の多くは、芸能活動のみで安定した収入を得られることは難しい状況。彼らが持続的に活躍できる仕組みが必要。
- 離島においてもマネジメントやプロデューサーの人材育成が必要である。
- 高齢化や過疎化などに伴い、地域だけでは維持することが難しくなっている年中行事も含めた民俗芸能などに対しても支援が必要である。
- 文化活動に理解のある民間企業などの支えがあって成り立っていることを視覚化できるとよい。また、文化活動に協力することでメリットなどがあれば、もっと多くの理解や支援が得られるのではないか。

#### 【提案②】文化的価値の普及・啓発

文化とは、時代や立場（地域・団体）、人と文化との関わり方によって、その形や、文化に対する認識が変容していくものである。そのため、その文化本来の本質的な価値や歴史的な背景などが時代の経過とともに伝わりづらくなっている。例えば、離島における豊年祭などの祭祀については、芸能披露やイベントとしての側面が重視され、農耕祭祀との関係性等といった本来の意味や価値の部分が若い世代に伝わりづらい。また、空手においては、競技空手がスポーツとして世界に普及していく一方で、伝統空手が持つ普遍的な部分が伝わらないなどがあげられる。

琉球文化の普及・啓発については、県民一人ひとりが琉球文化に対する関心や理解を深めていくことが重要である。そのためには、文化体験や継承活動をとおして、琉球文化が持つ独自の魅力を伝えるとともに、その文化が形成された歴史的背景や、先

人たちの想いとといった本質的な価値の部分についても伝えていく必要がある。

特に、県民への普及・啓発については、次世代を担う子どもたちに対する地域学習や歴史教育といった教育分野と連携した取組が重要である。また、社会人などに対しては、企業の社会貢献活動や地域活動などをおして文化にふれあう機会の創出が期待できる。地理的要因により本島地域に比べて学ぶ機会が少ない離島地域においては、自然、歴史、文化などが学べるような場や機会を創出するため、デジタル技術の活用なども含めた効果的な普及・啓発についても検討していく必要がある。

国内外への情報発信については、関係機関が連携したうえで、情報を集約・発信していく必要がある。その際は、(例えば、国外に対しては言語や文化の違いなど)ターゲットに合わせた効果的な発信手法について工夫・検討していくことが重要である。

また、発信スキルを持った専門人材の活用も必要である。

#### 委員意見

- 普及・啓発は大切だが、入口と出口のバランスをはかり、量より質の人材の育成が必要。
- 先人が残した大事な文化が、沖縄がリードしないと、各国でその正確さが伝わらないと危惧する。国際社会でどこまで応用できるかも検討することが必要。
- 先人達がどのような想いを持ってこれらの文化を生み出したかのかという部分も継承していくことが大切。
- 普遍的な部分と時代によって変えていくべき部分のバランスを取りながら継承することが必要。
- 琉球の文化を具体的にどうやって県民に広めて、どういう体制を築いて、本当に実のあるものにしていくか、というのが課題。特に教育という面では非常に重要ではないか。
- 教育現場と連携し、沖縄の歴史・文化を普及する事業を興す必要がある。専門人材やカリキュラム、ツールなどの体制を築く必要がある。
- 検定などは、文化に対する知識や愛着を醸成するためにはよいツールだと考えている。検定などのツールを定着化させていくためには、取得したことによるメリットや活躍の仕方なども示すことが必要である。
- 文化交流を通して、県内各地に存在する文化の多様性を紹介することも必要。
- 琉球文化について、総合的・横断的な情報発信が必要。
- 琉球文化に関する情報を発信するためには、文化専門のプラットフォームのようなものが必要。
- 琉球文化に対する海外や観光的な要望にどこまで応えるか。それをどのように普及・啓発に結び付けていくのが課題。
- 情報発信を行っていくうえでは、民間企業の活力を活用するなど、連携しながら実施すると幅広いものになるのではないか。
- 宮古・八重山地域に自然、歴史、民俗文化、民俗芸能学などが学べるコミュニティカレッジのようなものがあるとよい。
- 新たな技術(Ar,VR)などを活用することで、沖縄が届けたい歴史や文化を離島のみならず世界中にクオリティの差がなく届けることができる。
- 情報は発信する先によって戦術が変わってくる。プラットフォームを構築し、どこに向けて発信するか明確にすることが必要。
- 専門人材は歴史・文化に関わらず発信も含めた中間的なスキルを持った人材も必要

### 【提案③】新たな価値(魅力)の創出

創作組踊や創作エイサーなど、伝統文化を継承する中で時代のニーズに沿った新たなものを生み出すことは、文化芸術的な価値の評価だけでなく、新たな価値や魅力の創出にもつながることが期待される。また、観光をはじめとする異なる分野との連携や工芸と芸能など伝統文化間の連携により、新たな魅力を生み出すような取組についても検討が必要である。(例：伝統文化を生かした沖縄らしい観光サービス、文化の歴史的ストーリーにより生み出される琉球文化の新たな魅力)

さらに、近年めまぐるしく進化しているデジタル技術を活用した取組も重要である。

新たな価値(魅力)の創出については、今後20、30年後の世界の状況を見据え、文化の発信手法や新たな技術を活用した取組について検討していくこととする。

#### 委員意見

- 観光など異なる分野との連携による琉球文化の新たな価値の創出について検討が必要である。
- 新しい価値の創出を議論する際には、変えてはいけない本質の部分を大切にすべきというのが前提にあってほしい。
- 伝統工芸を受け継ぎ、現代の時代に見合った新しい作品を生み出すことは、工芸に携わる人たちがしっかりと生活していけるだけの収入が得られる産業にするという問題と密着している。
- 芸能、工芸、文化等が王朝文化という軸でコンテンツづくりを実施することで、琉球文化の深い部分を知るコンテンツの可能性を感じた。一方で、各分野の担い手が互いのつながりをストーリーとして伝える部分まで至っていない。
- 琉球文化ルネサンスを検討していく今後の方向性として、新たなデジタル技術などをどううまく利用していくかという議論が必要。
- 近年めまぐるしく進化するデジタル技術(VR・AR等)を活用した琉球文化の新たな価値の創出。20年、30年先を見据えた上で、沖縄の歴史・文化をどのようにして伝え、他産業に活かすか検討が必要。
- Web3.0になりNFTなど新たなデジタル技術を様々な場面で活用できる。

## 7. 令和4年度における議論の進め方

令和4年度においては、今年度取りまとめた中間報告の内容をもとに、新たな振興計画や関連施策（個別計画）の内容等を踏まえ、具体的な事例なども参考にしながら、琉球文化を一体的に捉え、琉球文化ルネサンスの実現に向けた実効性のある提言の取りまとめに向け議論を進めていく。

### (1) 関連施策を踏まえた議論

琉球文化ルネサンスを実現していくためには、関係者（県、市町村、関係団体・個人、民間企業等）がビジョンを共有し、一体的かつ継続的に取り組んでいく必要がある。

そのためには、実効性のある提言のとりまとめを目指し、新たな振興計画や個別計画等の内容を踏まえ議論していく。

#### 委員意見

- 文化政策を推進するにあたり、県の組織のあり方の課題、現状どのような形で文化政策が進められているのか、またその改善点などについて確認する必要がある。
- 戦略的取組がどうあるべきかを議論する場などの検討が必要。
- 県としてこれまでの文化行政の施策を評価しつつ、どのようにして琉球文化ルネサンスとつながるかを考える必要がある【再掲】

### (2) 具体的な事例等を踏まえた議論

令和3年度においては、具体的な提言に向けた論点整理を中心に議論を進めてきた。そのため、実際に伝統芸能や伝統工芸の現場における現状と課題などについて十分な議論を行うことが出来なかった。

令和4年度においては、具体的な事例なども踏まえながら、令和3年度に整理した内容等について議論を深めていく。

#### 委員意見

- 教育（歴史教育）のあり方について具体的に議論が進められないか。県内外の先進事例を参考に、沖縄県内の教育の取組や課題があり、その課題を解決するためにはどのようにしていけばよいか議論を進めたい。
- （空手をはじめ）文化の普及においても、実技と歴史を同時に教えること、指導する人材の育成等を含めた文化教育のあり方を検討することが課題。
- 沖縄検定のあり方等、観光客や修学旅行生を惹きつけるような魅力や仕掛けを県全体で考えていくべき。
- 工芸と産業を結び付けるようなテーマで議論してほしい。
- 本島だけではなく、沖縄の離島をテーマにして議論を進めるのも重要。（例：宮古・八重山地域に自然、歴史、民俗文化、民俗芸能等が学べるようなコミュニティカレッジの創設など）
- デジタルコンテンツの重要度が増していく中で、県としてどういうふうに進めていくのか、市町村も

含めたうえでのあり方について検討していく必要がある。

- 琉球文化ルネサンスの実現イメージを具体化するような内容(例:進貢船の復元やその体験利用など)についても検討していきたい。

「琉球文化ルネサンス」に関する万国津梁会議  
中間報告（概要）

琉球文化の性格

琉球文化とは、亜熱帯島嶼の精神的・風土的要素をもとに、歴史的経緯や海外との関係性により形成された多様性かつ独自性の高いものである。

広い島嶼圏にある個性豊かな地域性

亜熱帯の気候風土、広範囲に島が広がる島嶼性など多様な環境を背景に形成された地域性の強い文化。

自然への畏敬の念や祈りの精神性

雄大な海や山を目前にした人々が自然への畏怖から生み出した世界観や精神性。信仰や祭祀、民俗芸能などの基礎となる。

琉球王国の体制下で洗練された芸術性

王族、上級階層の生活や外交の中で洗練され、庶民階級や地方にも波及し、伝統文化の骨格となった。

外来文化を取り込み発展させた国際性

世界との交易や、長い歴史の過程で様々な交流を通じて積み上げられてきた国際性豊かな性格を持つ。

琉球文化の本質的価値

自然への畏敬や祖先への敬いなど、  
先人達から今を生きる県民に  
継承されてきた沖縄のこころ

先人達から引き継がれている琉球文化は、目に見える部分だけでなく、精神的な部分においても琉球文化の本質的な価値として継承されている。

特に自然に対する畏敬の念や祖先への敬いなど、今を生きる県民の心にも根付いている先人達の思想・哲学などは、琉球文化の本質的価値として非常に重要なものである。

琉球文化ルネサンスとは

県民が自らの歴史・文化への理解を深め、それを大切にしつつ、日々の生活の中で関わりながら、新しい文化や生活スタイルを創造する、その大きな活動のこと

琉球文化ルネサンスのビジョン（将来像）

- 県民一人ひとりが地域の歴史・文化への理解を深め、先人達から継承されてきた伝統のすばらしさを実感し、自信と誇りを持つ。
- 日々の生活の中で琉球文化に親しみ、感動や共感を育むとともに、その魅力を国内外に広めていく。
- 琉球文化が、観光・産業・教育などの様々な分野と結びつき、新たな価値や魅力を創出することにより、生活と経済の好循環を生み出す。

琉球文化ルネサンスの実現に向けて

琉球文化を一体的にとらえた戦略的取組の必要性

- 琉球文化ルネサンスの実現に向けては、個別の取組だけでなく、関係者（県、市町村、企業、文化活動団体、個人等）が連携し、戦略的に取組を進める必要がある。
- そのためには、関係者が将来像を共有したうえで相互に連携していくための仕組みや、各々の主体的な取組に対する県の支援体制・財源などについて検討する必要がある。

提案①持続可能な仕組みづくり

- トータルプロデュース的な視点を持った一体的取組の推進
- 行政、民間企業、高等教育機関等を含めたステークホルダーが連携し、協働する仕組みづくり
- 文化活動を支える民間企業等への共感を広げ、支援する取組

提案②文化的価値の普及・啓発

- 文化体験や継承活動の機会の創出による本質的価値の普及・啓発
- 教育機関や企業などと連携した歴史・文化を学ぶ機会の充実
- 関係機関の連携による文化情報の効果的な発信

提案③新たな価値（魅力）の創出

- 伝統文化を継承しながら、時代のニーズに沿った新たな価値や魅力の創出
- 観光など異なる分野との連携、工芸と芸能など伝統文化間の連携による取組
- 最新デジタル技術を活用した取組の推進

令和4年度における議論の進め方

新たな振興計画や関連施策（個別計画）の内容を踏まえ、具体的な事例なども参考にしながら琉球文化ルネサンスの実現に向けた実効性のある提言のとりまとめに向け、議論を進めていく。

(1)関連施策を踏まえた議論

関係者がビジョンを共有し、一体的かつ継続的に取り組むための方策等について議論を深めていく。

(2)具体的な事例等を踏まえた議論

令和4年度においては、具体的な事例も踏まえながら、提言の内容について議論を深めていく。

## 【参考資料】

### 1. 委員名簿

	分野	氏名	所属等
1	文学	はてるま えいきち 波照間 永吉 ◎	公立大学法人 名桜大学大学院 国際文化研究科長 教授
2	文学	やまざと かつのり 山里 勝己	公立大学法人 名桜大学大学院 国際文化研究科 教授
3	歴史	おおた しずお 大田 静男	八重山歴史・芸能研究家
4	歴史	うえざと たかし 上里 隆史 ○	琉球歴史研究家
5	文化	いのうえ ちず	雑誌「モモト」編集長
6	伝統芸能	とみた めぐみ 富田 めぐみ	合同会社琉球芸能大使館 代表 舞台演出家
7	伝統芸能	かかず みちひこ 嘉数 道彦	国立劇場おきなわ 芸術監督
8	伝統工芸	おど しんじ 小渡 晋治	(株)okicom 常務取締役 琉球びんがた事業協同組合 特別顧問 「琉球びんがた普及伝承コンソーシアム」事務局長
9	民俗音楽 ／芸能	くまだ すずむ 久万田 晋	公立大学法人 沖縄県立芸術大学 芸術文化研究所長 教授
10	空手	ちねん けんゆう 知念 賢祐	沖縄空手道古武道連盟ワールド王修会 会長

◎：委員長、○：副委員長

## 2. 会議録概要

### (1) 第1回「琉球文化ルネサンス」に関する万国津梁会議

日時：2021年9月8日（水） 14：00～16：00

場所：沖縄県市町村自治会館 2階 大会議室

#### 会議次第：

1. 開会・あいさつ
2. 委員紹介
3. 委員長・副委員長の選任
4. 本会議の進め方とスケジュール
5. 琉球文化ルネサンスの考え方について
6. 本日議論する内容について
7. 意見交換
8. 閉会・事務連絡

#### 委員意見の整理

琉球文化における「多様性」、「国際性」、「新たな価値の創出」、「普及・啓発」の視点から意見交換を行った。※「琉球文化の総合的な捉え方」、「琉球文化の本質的価値」、「琉球文化ルネサンスの考え方」、「琉球文化の多様性」、「国際性」、「新たな価値の創出」、「普及・啓発」の項目に分けて記載。

#### ■琉球文化の総合的な捉え方

琉球文化は、重層的に捉えることで特徴づけができる。また、「王朝性」を絶対化しすぎず、多面的に捉えることが大事である。

##### <主な意見>

- 琉球文化を重層的に捉え、「王朝性」を絶対化し過ぎず、多面的に捉えることが重要。
- 琉球王朝のもとで生み出された文化が、島々の文化と相互に影響し合い、新しいことを取り入れることにより違ったものが生まれた。「王朝性」と「島々の文化」が相互に関係し合う構造を多くの人に認知してもらうことが重要。



## ■琉球文化の本質的価値

琉球文化の本質的な価値とは、自然に対する畏怖や祈りが核となっている。

しかし一方では、文化の担い手や立場の違いに応じて本質的価値の認識が異なる。

本質的価値を守るためには、様々な関係性を持つ文化のつながりを認識すること、また、時代とともに変容する文化に対し、守るべき「核」の部分が何か、どのような方策が必要かを議論が必要である。

### <主な意見>

- 自然に対する畏怖や祈りが島々の文化を形成した本質的な部分である。
- 祭祀や伝統行事などの根底には、自然への畏敬の念や神々への祈りがあり、とても大事にすべき核である。
- 多様な文化を受け入れる懐深さや、今の文化や工芸をつくる力強さも琉球文化の価値である。
- 伝統文化は時代によって変化するが、変えないもの、守る必要があるものを今後どうしていくのかという議論が必要。
- 県内と県外で、琉球文化の本質への理解は違う。一方で、文化の担い手の立場・状況によって、価値のとらえ方が違ってくことにも理解が必要。
- 新作組踊では伝統芸能の核を大切にしながら新しい創作活動を行っているが、何が核なのかと問われるとそれを答えるのは難しく、県内でも定義されていない。
- 新作組踊を創作するときには、伝統芸能を作り出してきた先人に対する畏敬の念をもつことが大切。そのような認識をもつ体制を整えることで、組踊の核から外れてしまったとしても修正が可能になるのではないか。

## ■琉球文化の「多様性」

琉球文化の多様性は、島々が持つ独自の自然や文化に表われていること、また、海外の異文化を取り入れるチャンプルー文化にも、その多様性が示されている。

さらに、琉球文化が持つ多様性を保持していく方法、その多様性という個性を総合力として、どう力（魅力）に変えていくかの議論が必要である。

### <主な意見>

- 琉球文化の多様性は、自然や、各島々が持つ独自の文化に表れている。
- 「チャンプルー文化」にも多様性が表れており、それが沖縄の価値に繋がっている。
- 自然や生物の多様性を豊かに持つ沖縄の強さ、沖縄の価値をうまく表現し、伝えていくことは重要である。
- 琉球文化が本来持っていた多様性を、いかにして保持していくのが課題。
- 個性(違い)を尊重しつつ、これらを総合力としてどう力に変えていくかという議論が必要。

## ■琉球文化の「国際性」

琉球文化そのものが国際性を有しており、特に、沖縄の芸能には他国にも共通する

普遍的な価値を持つ。一方、現代社会における国際的な取組を行う上では、相手国の事情（習慣）に合わせることも必要である。

＜主な意見＞

- 琉球文化そのものが国際的なものである。
- 琉球文化は、南西諸島の人々が外との交流により新しい文化をつくり出している。
- 沖縄の芸能は、どの国でも共通する普遍的価値を内包している。
- 国際的な取組をするうえでは、相手の国の事情に合わせて展開していく必要がある。

### ■琉球文化の「新たな価値の創出」

芸能では創作組踊や創作エイサーの展開、工芸分野では職人とビジネス分野との連携に関する取組等、すでに（ルネサンス的な）取組がはじまっている。

伝統を受け継ぎながら時代に見合った新しい作品を生み出すことは、産業化の議論にも繋がる。

＜主な意見＞

- 工芸（紅型）の分野においては、通常職人ではできない企業交渉や知財を守っていくためのサポート、スケジュール管理の部分をビジネスの分野が補っていくなど、工芸として新しいかたち（仕組み）をつくっている。
- 伝統を受け継ぎ、新しい時代に見合ったものを生み出すことは、工芸に携わる人たちがしっかり生活していけるだけの収入が得られる産業にする問題と関わっている。
- 新たな価値の創出を議論する際には、変えてはいけない本質の部分を大切にすべきというのが前提にあってほしい。

### ■琉球文化の「普及・啓発」

沖縄の歴史や文化を県民に広めるため、教育現場など関係機関との連携や専門人材の確保、体制（仕組み）づくりが大きな課題である。

また、総合的・横断的な情報発信のあり方に関する議論が必要である。

＜主な意見＞

- 琉球文化に対する海外や観光的な要望にどこまで応えるか。それをどのように普及・啓発に結び付けていくのが課題。
- 沖縄の歴史文化について、具体的にどう県民に広め、どういう体制を築き、本当に実のあるものにしていくのかというのが課題。特に教育という面では非常に重要。
- 県は教育現場などと連携し、沖縄の歴史・文化を普及する事業を興す必要がある。
- 普及・啓発の事業を行うにあたっては、専門人材をどう確保するかという課題がある。
- 教育については、新しいツールを活用することで本物を伝えることができる。
- 琉球文化について、総合的・横断的な情報発信が必要。
- 現代の観客に合わせた鑑賞の工夫は実施すべき点があれば推進していく必要がある。

- 国立劇場おきなわでは、小・中学生へワークショップ形式の派遣事業を実施している。
- 作品をみてもらうだけでなく、ワークショップとして鑑賞ポイントを紹介し、組踊そのものの楽しみ方を理解してもらうことが大切である。
- 県外公演の場合は元々芸能に興味があるかどうかなど観客の層にあわせて、事前ワークショップの内容を変更している。
- 今後は実演家とともに、舞台のマネジメントやプロデュースを行う人材を育てていく必要がある。

## (2)第2回「琉球文化ルネサンス」に関する万国津梁会議

日時：2021年11月2日（水） 14：00～16：00

場所：沖縄県市町村自治会館 2階 大会議室

会議次第：

1. 開会・あいさつ
2. 第1回会議の振り返り
3. 事務局報告
  - ・今年度の検討の進め方
  - ・本日もご意見いただきたいテーマについて
  - ・検討テーマに関する事例提供について

### 4. 意見交換

検討テーマにそった意見交換

「新たな価値（魅力）の創出」、「伝統的価値の普及・啓発」、「人材育成」、  
「継続させるための仕組みづくり」

### 5. 閉会・事務連絡

## 委員意見の整理

「琉球文化ルネサンス」を実現するための課題整理に向け、以下のテーマについて意見交換を行った。

- |              |                 |
|--------------|-----------------|
| ①伝統的価値の普及・啓発 | ②継続させるための仕組みづくり |
| ③新たな価値の創出    | ④人材（担い手）の育成     |

※「④人材（担い手）の育成」については、①～③に分類して整理

### ■伝統的価値の普及・啓発

文化に対する取組は、各分野で様々な取組が行われているものの、それらを総合的・横断的にとらえて、「琉球文化」の歴史的背景や特徴を含めた内容を、わかりやすく伝えるための仕組みが必要である。

<主な意見>

- 検定などは、文化に対する知識や愛着を醸成するためにはよいツールだと考えている。検定などのツールを定着化させていくためには、取得したことによるメリットや活躍の仕方なども示すことが必要である
- 文化に関する情報を発信するためには、沖縄文化専門のプラットフォームのようなものが必要。
- リスペクトされるような専門性を持った人材を育成することに力を入れる必要がある。
- 普遍的な部分と時代によって変えていくべき部分のバランスを取りながら継承することが重要。各分野で行われている取組などの情報を集約し、「琉球文化」の歴史的背景や特徴を含めた内容を、わかりやすく発信する仕組みが必要。
- 地域・学校における普及・啓発の事例(石垣島・とびら一ま大会、ハワイ等)
- 情報発信を行っていくうえでは、民間企業の活力を活用するなど、連携しながら実施すると幅広いものになる。
- 宮古・八重山地域に民俗芸能学などが学べるようなコミュニティカレッジのようなものがあるとよい。
- 琉球文化ルネサンスの実現イメージを具体化するような内容(例:進貢船復元やその体験利用等)についても検討していきたい。
- 新たな技術(AR、VR)などを活用することで、沖縄が届けたい歴史や文化を離島のみならず世界中にクオリティの差なく届けることができる。
- 先人達がどのような想いを持ってこれらの文化を生み出したかという部分も継承していくことが大切。
- 琉球文化を「歴史の中で理解していく」という視点で戦略的に文化政策を進めることが重要。
- 伝統的価値の普及・啓発については、団体や個人の各取組を一体的に進めるための方向性が示されていない。今後の方向性を示し、共有することが課題。

## ■継続させるための仕組みづくり

専門的な人材などが継続して活躍できるようなサイクル(仕組み)の構築や、文化の担い手や専門人材をサポートする取組や体制が必要である。

<主な意見>

- 沖縄の歴史や文化に関わる人材(職人など)が生活できる仕組みづくりが必要。
- 文化活動に理解のある民間企業などの支えがあって成り立っていることを視覚化できるとよい。また、文化活動に協力することでメリットなどがあれば、もっと多くの理解や支援が得られるのではないかと。
- 職人ができない部分(企業との交渉や販路開拓など)をビジネスの分野で補うなど、持続可能な仕組みにしていく必要がある。
- 実演家の多くは、兼業で舞台公演を実施しており、その努力により公演数も増加している。一方で、時間の融通がきく職業を選択している面もあるため、安定しているとはいえない。持続的に活躍できる仕組みづくりが必要。
- そのためには、琉球文化に対するニーズが必要であり、敷居を下げつつも、本質を崩さずに発信する方法の検討が必要。それが新たな価値の創出にもつながると考えられる。

## ■新たな価値(魅力)の創出

他分野との連携や、デジタル技術にみられる最新技術の活用により、文化活動も新たな価値(魅力)を生み出す可能性があることも示された。

### <主な意見>

- 伝統工芸(紅型)と民間企業の連携による循環型経済の実現に向けた取組事例
- (伝統工芸品を)商品としてトータルでプロデュースしていく人材が必要である。
- 琉球文化ルネサンスを検討していく今後の方向性として、仮想空間や仮想現実をどううまく利用していくかという議論が必要。
- デジタル技術を活用した今帰仁グスクの取組事例(遠隔授業や観光分野での活用)
- 学校教育における新たな技術の活用(対面授業との兼ね合い)
- 今後の沖縄や世界の状況を見据えたうえで、どのようにして文化を伝え、活用していくか、という議論が必要である。

### (3)第3回「琉球文化ルネサンス」に関する万国津梁会議

日時：2022年1月24日（月）15：00～17：00

場所：ホテルサンパレス球陽館 パレスコート

会議次第：

1. 開会・あいさつ
2. 第2回会議の振り返り
3. 議題
  - ①これまでの議論の整理
    - ・琉球文化の本質的価値
    - ・琉球文化ルネサンスのビジョン（将来像）
    - ・琉球文化ルネサンスの実現に向けた課題
  - ②次年度以降の議論の方向性について
4. 閉会・事務連絡

#### 委員意見の整理

これまでの議論を整理と次年度以降の議論の方向性について意見交換を行った。

#### ■琉球文化の本質的価値

県民に何を示していくのか目的を明確にする必要がある。また、価値観は時代に応じて変容していくものであることも踏まえながら、琉球文化そのものの価値と、文化が生まれた背景も伝えていくことが重要である。

##### <主な意見>

- 目的をどこに設定するのか。しっかりとした文量で細かく書く必要がある。一方で、受取手の記憶に残るための短い表現もいれたほうがよい
- 本質的価値というのはとても難しく、社会は変容している。現代社会では、自然への畏怖や意味を理解せずに文化を継承している。我々の価値観の変容を含めた検討が必要。
- 文化的な本質的価値は、答えをすぐに出せるような簡単なものではない。次年度以降、さらに踏み込んで検討していくのがよい。
- 琉球文化の価値は大きく2つある。ひとつは文化そのものが持っている価値、もうひとつは文化が生まれた歴史背景や先人達の想いである。その文化的背景も今後伝えていくべき重要なことではないか。

## ■琉球文化ルネサンスのビジョン(将来像)

### <主な意見>

- 伝統的な産業の背景に文化があり、産業を育んできたことそのものが文化ということを担い手や客、情報発信する人も理解する必要がある。そのため、もう少し踏み込んだ表現ができないか検討していく必要がある。
- 今後の社会において「文化」はこれまで以上に強みになる。沖縄県においては、文化の保存だけでなく、沖縄の強みの1つになることを意識して、将来像の実現に向けて推進していただきたい。
- 文化や言語は結果が数や文字で表れにくいので、現代社会においては非常に苦しい立場である。しかし、沖縄だからこそやらなくてはいけないという方向性を打ち出さないと、ルネサンスという言葉には似合わない。
- 観光でもよく言われている量から質へという問題があるが、本物を見せることが今後の沖縄の文化に関する1つのキーワードになる。

## ■琉球文化ルネサンスの実現に向けた課題

### (1)琉球文化を一体的にとらえた戦略的取組の必要性

#### <主な意見>

- 戦略的な取組を誰が、どこで、どのように決めるのかという部分が見えづらいので、それが来年度以降の検討課題の一つになる。
- 一体的に推進することは理想だが、どこがそれを取りまとめて推進するかという課題がある。
- 県としてこれまでの文化行政の施策を評価しつつ、どのようにして琉球文化ルネサンスとつながるのかを考える必要がある。

### (2)持続可能な仕組みづくり

#### <主な意見>

- 行政の体制が縦割りになっているため、ビジョンで求められているような横断的な取組は進めにくいのではないかと。大きなビジョンのもとで動いていくためには、どうすればよいか話し合いが必要だと思う。
- 情報は発信する先によって戦術が変わってくる。プラットフォームを構築し、誰に向けて発信するか明確にすることが必要。

### (3)文化的価値の普及・啓発

#### <主な意見>

- 専門人材は歴史・文化に関わらず発信も含めた中間的なスキルを持った人材も必要。
- 普及・啓発は大切だが、入口と出口のバランスをはかり、量より質の人材育成が必要。
- 先人が残した大事な文化なのに、沖縄がリードしないと、各国でその正確さが伝わらないと危惧する。国際社会でどこまで応用できるかも検討することが必要。
- 沖縄検定的な取組のあり方にしても、一般の観光客や修学旅行の若者を惹きつけるような魅力や仕掛けを県全体で本気になって考えることも必要。



#### (4)新たな価値(魅力)の創出

<主な意見>

- Web3.0 になり NFT など新たなデジタル技術を様々な場面で活用できる。重要なキーワードなので、Web3.0 の文言を追加していただきたい。
- 芸能、工芸、文化等が王朝文化という軸でコンテンツづくりを実施することで、琉球文化の深い部分を知るコンテンツの可能性を感じた。一方で、各文化分野の担い手が互いのつながりをストーリーとして伝える部分まで至っていない。

#### ■次年度以降の議題案について

文化政策を推進する県組織のあり方や文化施策の改善点、戦略的取組を検討する組織体のあり方を議論するとともに、個別テーマとして文化教育のあり方、工芸と産業の連携、離島の文化政策、デジタルコンテンツの活用なども議論が必要である。

<主な意見>

##### 琉球文化を一体的にとらえ、継続させるための仕組みづくりについて

- 文化政策を推進するにあたり、県の組織のあり方の課題、現状どのような形で文化政策が進められているのか、またその改善点などについて確認する必要がある。
- 戦略的取組がどうあるべきかを議論する場などの検討が必要。

##### 琉球文化ルネサンスの実現に向けたテーマ別、段階的取組について

- 教育(歴史教育)のあり方について具体的に議論が進められないか。県内外の先進事例を参考に、沖縄県内の教育の取組や課題があり、その課題を解決するためにはどのようにしていけばよいか議論を進めたい。
- (空手をはじめ)文化の普及においても、実技と歴史を同時に教えること、指導する人材の育成等を含めた文化教育のあり方を検討することが課題。
- 沖縄検定のあり方等、観光客や修学旅行生を惹きつけるような魅力や仕掛けを県全体で考えていくべき。
- 工芸と産業を結び付けるようなテーマで議論してほしい。
- 本島だけではなく、沖縄の離島をテーマにして議論を進めるのも重要。
- これからデジタルコンテンツの重要度が増していく中で、県としてどのように進めていくのか、市町村も含めたうえでのあり方について検討していく必要がある。

##### 次年度の会議の組織体、あり方について

- Web 会議を活用し、世界中のウチナンチュや若者等の、全く異なる視点も含めた意見を聞き、様々な視点から議論していくほうが独りよがりにならない内容になる。
- 今後の議論の中に、分野の違う方々、文化に携わっていない方々や行政の方々も交えて取り入れていただければと思う。
- 次年度は宮古の委員の追加や、現場の人の声を聴きながら進めていただきたい。